

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 3

朴 希沙 (Kisa Paku)

前回は、カトリーヌの事例を用いて、マイクロ・アグレッションの導入を試みました。今回もふりかえりを行い、また2回目の導入としてマイクロ・アグレッションに関して行われたある興味深い実験を紹介します。

・はじめに ～前回のふりかえり～

5月の末、『Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual

Orientation』の翻訳初稿を仕上げるために、私は毎日パソコンを叩き、うなっていました。さして英語ができるわけでもなく、ただマイクロ・アグレッションを体系的に紹介する本を日本語に翻訳したいという気持ちから始めた企画なので、いつも試行錯誤しながら作業をしています。自分一人では決してできないことですが、実際始めてみると色々な人が協力してくれて、本当に助かっています。この翻訳は、「マイクロ・アグレッション翻訳会」というチームで行っているのですが、そこで大切にしている

ことは、この翻訳会の中でも生じうるマイクロ・アグレッションについて、出来るだけオープンに話し合うことです。メンバーには様々な性別の人がいますし、職業も多様です。そのため、立場の違いから生じる対立やそれに対する緊張をいつも少しはらんでいます。英語が得意じゃなくても、研究者じゃなくても、色んな立場のメンバーがいるとグループの厚みが出て、マイクロ・アグレッションについての考察がより深まります。

さて、今回はこの著作からカトリーヌの事例を紹介し、マイクロ・アグレッションの導入を試みました。この事例においてカトリーヌの面接官は、一方では女性と男性で名前の呼び方を変えたり（男性社員に対しては「〇〇さん」と苗字を呼ぶのに対し、女性社員には時に「〇〇ちゃん」と下の名前で呼ぶ）、カトリーヌの就職に対する熱意を「君ならいつでもイケ男を見つけられるのに」と言って笑ったりします。ところが他方では、「私は社員が男性であるか女性であるかなんて、考えたことすらない」「人間は平等に成功する機会を持っている」と発言します。これは旧来の露骨な差別とは異なり、無意識的で曖昧で現代に特徴的なマイクロ・アグレッションの特徴を表しています。マイクロ・アグレッションは、相手に矛盾したメッセージを同時に送ります。そのため、その被害にあった人は出来事をどのように意味づけ、判断し、行動するか迷います。また周囲にも「解釈の問題」「気の持ちよう」等と理解されづらいことも特徴的です。マイクロ・アグレッションには、被害者を孤立させてしまうという特徴もあるのです。例えば、人種差別の撤廃

を訴える黒人に対して、白人の友人が「肌の色なんて関係ないじゃないか」「君を黒人として見たことなど一度もないよ」と発言することなども、マイクロ・アグレッションの一例といえます。これについては、皆さんはどのように感じるでしょうか？この例でいえば、たしかに白人は黒人差別を経験することはないでしょう。人種を意識するかしないかは、個人の選択次第かもしれませんが、しかし黒人にとったら、人種差別はいつどこからやってくるか分からず、それを自分でコントロールすることはほとんどできません。また、かすかな見下しから露骨な差別まで、日々様々な葛藤や差別を、リアリティを持って体験しているかもしれません。そのため、この発言は人種差別のリアリティや体験を否認し、無価値化するという意味で、マイクロ・インバリデーション（Microinvalidation）と呼ばれています。そしてマイクロ・アグレッションを構成する3つの分類（Microassault、Microinsult、Microinvalidation）の中でも、Microinvalidation が最も有害であると言われています。

マイクロ・アグレッションについて体系的な研究を行っている Sue は、もともとカウンセリング及び臨床心理学の研究者です。Sue はカウンセリングを始めとした対人援助の場面においてもマイクロ・アグレッションが生じうることを指摘しています。対人援助は被援助者の利益を第一とし、その成長や問題の解決等のために行われるものですが、そのような場所でも意図せずにマイクロ・アグレッションが生じ、信頼関係が損なわれたり、援助の中断が生じたりする可能性があることが示されています。例

えば、職場でただひとり有色人種であることの孤独感を表明した人に対して「あなたは被害意識が強すぎるかもしれませんよ。私たちは違いではなく、共通点にもっと着目すべきではないでしょうか？」と白人の支援者が発言すること（Color Blindness）等がその例です。日本の対人援助やカウンセリングの現場では、マイクロ・アグレッションはどのように生じているのでしょうか？マイクロ・アグレッションは多くの場合無意識で生じるため、それを完全になくすことは出来ないと思います。むしろ、マイクロ・アグレッションはいつでもどこでも生じうるし、私たちはその可能性をそもそも抱え込んだ存在であることを認めるところから、マイクロ・アグレッションについてのオープンな対話が始まるのかもしれませんが。日本の対人援助の現場におけるマイクロ・アグレッションの実態とそれをどう取り扱っていくのかは、今後探求したいテーマのひとつです。

・マイクロ・アグレッション： イントロダクション②

前回、マイクロ・アグレッションを生涯にわたって継続的に経験することによって影響が蓄積し、有害な結果が生じることを説明しました。その影響のひとつに、精神的エネルギーを枯渇させるという点があります。Sue(2010)はそのひとつの例として、白人の教師がアジア系アメリカ人の学生に、「君たちは、これが得意だろう」と数学の解き方を皆に示すよう言う場面を取り上げています。ここで、この学生にはおそらく

内的な思考プロセスが生じるだろうということです。それは例えば「これは賞賛なのだろうか？それとも人種的な偏見を強制されているのだろうか？」といったことです。かなりのエネルギーが状況を認知的に評価することに費やされるかもしれません。またこういった曖昧さに加えて、アジア系アメリカ人の学生は反応すべきかどうか、反応した結果どのようなことが生じるか評価するためにもエネルギーを費やさなくては いけません。そして、このような内面の認知的プロセスが刺激されることによって、学生の注目とエネルギーは本来の課題からそらされ、その学習能力や問題解決能力が損なわれてしまうといえます。

今回は、露骨なレイシズムとより曖昧なマイクロ・アグレッションを比較して、それらに対して費やされる認知的エネルギーについて検証したある実験を紹介します。これも、Sue(2010)に掲載されているものです。

ー実験①：認知的エネルギーについて

この実験で研究協力者たちは、ある会社の採用決定過程を本物だと信じ込まされて目撃します。例えば履歴書・面接官のコメント・推薦文などが比較される場面を見ます。研究者たちは、どの人物が採用されることが最も適切か、全く疑問の余地がないような状況を作り出しました。その人は、採用されることもあれば、されないこともありました。

研究者たちは黒人と白人の研究協力者に示す不採用の理由を、あからさまに人種差別的なものから曖昧なものへ色々と変化させました。またその実験の直後に、研究協

力者たちはストループテストを受けました。これは、例えば「赤」「青」「緑」等の文字と、その文字がかかれている色が異なっており、文字に関わらず色を言うといったもので、認知的・心理的な遂行機能や努力機能を測定することを目的としたものです。

テスト前に不公平な決定を目撃した黒人は、このテストでミスをしました。しかしより重要なことは、露骨なレイシズムを目撃した人より、かすかで曖昧なレイシズム（マイクロ・アグレッション）を目撃した人の方がミスが多かったのです。一方、興味深いことですが、白人の研究協力者の結果は真逆に表れました。白人はかすかなレイシズムよりも、露骨なレイシズムに対してより大きな反応を見せたのです。

この結果について研究者たちは、黒人は歴史的に露骨なレイシズムを受け続けており、それに対するコーピング戦略を発展させてきたと考えました。例えば、露骨なレイシズムに対しては先のアジア系アメリカ人の学生が行ったような推測は必要ありません。しかし曖昧で、表面上の行動の下に存在する隠されたレイシズムは、心理的エネルギーを枯渇させてしまいます。露骨な

レイシズムがいいというわけではもちろんありませんが、それが人を傷つけ、損ない、暴力的であることは多くの人が認めることです。むしろ、このように考えるべきだと思います。社会の中で軽んじられているグループに属する人々は、①露骨で明確な形のレイシズムと、②その影に隠れて見えづらいが有害なマイクロ・アグレッションという2重のストレスにさらされており、その両者がともに、もしくは同等に有害であるということです。

以上、今回はマイクロ・アグレッションに関する実験を紹介することを通して、なぜ露骨なレイシズムだけでなくマイクロ・アグレッションについて検討することが必要であるかを述べました。次回以降もマイクロ・アグレッションの具体的な事例を紹介しながら、考察を深めたいと思います。

・・・続く

【参考文献】

Sue, D.W.(2010). *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons.